

### 「二者択一の問題点」

学校法人仙台育英学園  
仙台育英学園高等学校・秀光中等教育学校  
常務理事・校長室長 加藤 聖一



2020年は歴史の中でどのようなように評価されるのでしょうか？一つ明確に言えることは「世界を巻き込む大きな転換点となった」と総括され、今後も歴史の教科書にその事実が残っていくと思えます。

新型コロナウイルス（以下、新型コロナ）出現がこの大きな転換点、たとえられるでしょう。新型コロナ感染拡大による影響は、人類が21世紀になって潜在的に抱えていた問題を大いに顕在化させ、我々人類が将来にわたって「どのように在りたいのか」という問いを投げかけています。

このような問いに関して一つの考え方を提示している本を紹介したいと思います。「緊急提言 パンデミック 寄稿と

# 図書館だより

## 第47号

秀光中等教育学校 仙台育英学園高等学校 図書館 印刷所 印刷

インタビュー』（2020年10月30日初版発行・河出書房新社）です。イスラエルの歴史学者・哲学者ユヴァル・ノア・ハラリ氏の著作です。他の著作も含め、ハラリ氏が一貫した考えと特徴的な時間軸を持って執筆されているところに私は魅力を感じています。なお、同著の内容はハラリ氏が3月から4月下旬にかけて行ったインタビュー・寄稿文をもとに構成されており、社会・歴史の全体像を捉えた当時の指摘は、本稿を作成している11月にますます現実感を持って受け入れられるものになっています。

ハラリ氏は同著の中で、新型コロナ禍における世界の混乱の要因にもなっている「誤った二者択一の問題」について分析しています。その一つに、「健康のために個人のプライバシーを犠牲にするか？」という誤った問題設定について取り上げています。ハラリ氏は「全体主義的な監視

一対策として、テクノロジーを活用しています。例えば、一部の国では接触確認アプリを国民の携帯端末にインストールさせる制度を強制的に推進しています。このような国では、健康を守るために、個人の健康情報を政府が管理しやすい体制を構築するといった方針を打ち出し、一定の成果を出しています。

しかし、国家にとってこのようなデータは国民統制する上で魅力的なものであり、新型コロナ終息後においても運用を継続したいという誘惑に駆られやすいものです。このようなことから、健康とプライバシーは二者択一で語られることがあります。他方、一部の国では、偽りのない必要な情報を十分提供しながらアプリのインストールを自国民の自主性に委ねるという方針を打ち出しており、一定の成果を出しています。こういったアプリは「政府が各個人をモニタリングするためでなく、各個人が政府をモニタリングするために使える」ことを考えると、国民の自主性を尊重しながら国民の権利を民主的に拡大することによって、健康とプライバシーは両立可能であると指摘しています。

にグローバルイズムを放棄するか？という誤った問題設定について取り上げています。例えば、自国民の健康を第一優先とするために、ワクチン開発・配布における他国との協力関係を放棄することです。ハラリ氏は、A国にいるウイルスがB国にいるウイルスに対し、人間により効果的に感染させる方法について情報交換できないという例を示しながら、「情報の共有こそ、ウイルスに対する人間の大きな強み」であり、この強みを生かすためには「グローバルな協力と信頼の精神が必要」と分析しています。こういったことから自国民の健康を第一とするというナショナリズムは、他国との協力・信頼関係構築というグローバルイズムと対立しません。寧ろ、ウイルスがいつ・どこで変異するか不明な点から、二者択一で捉えること自体が危険であると言えます。

私たちが「どのように在りたいのか」と考える際や他者にそのことを伝える際に、二者択一の問題で捉えることは使い勝手が良いことが多々ありますが、ハラリ氏の分析のように全てが二者択一の問題で成立しているわけではありませぬ。寧ろ、目的に沿って両方を工夫して取り入れ、多様性を生むことがUCA（Volatility・変動性、Uncertainty・不確実性、Complexity・複雑性、Ambiguity・曖昧性）の時代を生きる私たちには大事ではないでしょうか。

# 仙台育英学園 図書館利用ガイド



いつも図書館を利用している人も、あまり利用しない人も、これから利用する人も、もう一度図書館のルールをおさらいしてみましょう！



## 図書館はどこにあるの？

宮城野校舎：栄光3階  
(特進執務室の上)  
多賀城校舎：ライオンズホール2階  
(フレックス・技能執務室の隣)  
コースによっては遠く感じるかもしれませんが、ぜひ足を運んでくださいね！



## 図書館を利用するときの約束

- ① 土足禁止 外靴はロッカーに入れましょう。
- ② 飲食禁止 図書館内は飲食禁止です。
- ③ 間隔をあけて席に座る 学習機を利用するときには、間隔をあけて座るようにしてください。マークのある席の利用はできません。



## いつ利用できるの？

朝（授業が始まる前）やお昼休み、放課後に利用できます。貸出・返却はもちろん、学習機の使用もできます。パソコンは学習用のみ使用できます。(USBは使用禁止です)  
※授業時間中の自習には利用できませんので注意してください。



## どうやって本を借りるの？

1人3冊まで、2週間借りることができます。借りたい本を持ってカウンターで貸出手続きをします。雑誌や参考書も貸出できます。学年・クラス・名前を教えてください。  
※無断で持ち出しは絶対にしないこと！



## 本の探究者賞ってなに？

1年間に多くの本を読んだ人を表彰します。各学年上位3名(中学生は2名)に賞状と賞品を贈呈します。さらに、努力賞として20冊以上(中学生は10冊以上)借りた全員に賞状を贈ります！ぜひたくさん本を読んでくださいね。



賞品のブックカバーとしおり（色はランダムです）

鏡はよく、物語の中で不思議なモチーフとして登場する。ルイス・キャロルによる『鏡の国のアリス』では、アリスは鏡をくぐり抜けて異世界へ迷い込み、「ボ・ローリングによって書かれた『ハリーポッターと賢者の石』の中では、鏡を見る者の心の奥にある一番強い望みを見せてくれる鏡を通して、ハリーは亡くなった両親を見に毎日鏡と向き合う。この作品の主人公「僕」も、鏡を通して不思議な体験をしている。

物語は、「僕」が彼の家で来客とともにそれぞれの怖い体験談を話している場面から始まる。一九六〇年代末、主人公の「僕」は新潟県の中学校で夜警の仕事をする。夜の学校は当時の「僕」にとって怖いものではなかった。真面目な「僕」は、両手に懐中電灯と剣道の竹刀を持って、全ての教室が施錠されているか確認して回っていた。しかし、ある日の夜はいつもと様子が違っていた。なんとなくベッドから起き上がりがたくな。それでも仕事だからと巡回をしていると、廊下の壁にいつもはない大きな鏡がある。まるで「僕」を支配するかのような鏡に映る僕に危害を加えられそうになった彼は、持っていた竹刀で鏡をたたき割る。しかし、翌朝見るとそこには鏡の破片はなく、自分が吸った煙草の吸い殻と、持っていた竹刀が落ちていただけだった。

この作品は、「僕」が来客に向けて体験談を話す一人称によって物語が進んでいる。彼が鏡と出会うシーンの中で、「僕」はこう話している。「煙草を三回くらい吹

かしたあとで、奇妙なことに気がついた。鏡の中の僕は僕ではなかったのだ。」本来、鏡に映った自分は反射した光で見える自分の像なのだから、自分自身であるはずである。しかし、作品の中で「僕」は、わざわざ鏡に映る像が自分自身ではなかったと言っている。

私は、たびたび自己嫌悪に陥る。テストで思うような点数がとれず、あと三十分長く机に向かっていたら、と過去の自分に後悔したとき。自分よりも優れている人を見て嫉妬していた数秒前の自分に気が付いたとき。自分を嫌う感情は、何も考えずに生活していた時には気が付かなかった、自分の悪い感情や過去の過ちに気が付いたときに生まれる。しかし、悪い感情を持つていた時、過ちを犯した時の自分は、確かに自分自身であるが、鏡に映る今の自分ではない。目の前に自分を映す鏡をどんなに激しい音と共に割ったところで、消したい過去の自分が消えることはなく、何とも言えない気分が悪さと憎悪という破片が心の奥底まで深く刺さるだけである。

また、学生である私たちは、自分自身と向き合わなければいけない機会も多い。高校、大学受験の時には、合格のために自分の長所を述べて自己アピールをしなければならぬし、洋服を買う時でさえ、自分の体形や服の好みと無意識に向き合って洋服を選ぶ。もちろん、自分と向き合うことで自分自身の良いところも見つかるが、それと同時に見たくないものも見えてしまう。悲しいことに、見たくないものは良いとこ

もし私が七日後に死ぬとしたら、私は何を考え、行動するのだろうか。まずは親戚回りか、それとも全財産を使って沖繩旅行か。どれもパツとしない、わざわざ死ぬ前にやることはないなと我ながら呆れてしまった。

何の本を読もうかと本屋で探していたら、流星群とかわいらしい少女が立っている表紙を見つけ、思わず手に取った。

「あなたが死ぬ日付は、七日後です。」と、突如現れた死神に余命宣告された主人公の渚は、自暴自棄になり自殺を図るが、同級生の帆波に止められる。帆波は昔よく笑っていたが、いつしか笑顔が消えた、渚が思いを寄せる相手である。渚に残された七日間という短い時間の中で、彼は昔の彼女の笑顔を取り戻そうとする。

私は最後までこの本の主人公との共通点を一つも見つけることができなかった。自殺願望もないし、体もそこまで弱くない、学校の屋上に勝手に入ったこともないし、もちろん死神に出会って突然余命宣告をされたこともない。

この本を読んで一番印象に残ったのは、渚が人生の最後の日、七日間の朝食を家族とともに取るシーンだ。これまで渚は、何かしらの理由をつけて家族と過ごす時間を大切にしていなかったが、いざ死ぬということが分かった時に、一番身近にいたくれた家族に感謝を伝えた。私はこの場面から、いつも通りに過ごしていた気が付かない、日常にありふれていることがあるのだと実感した。もし渚と同じように母親が

ろよりもなぜか鮮明に記憶に残り、再び私たちを自己嫌悪に陥れるのである。「自分の欠点を愛せば本当の幸せを手に入れることができる」といった内容のネット記事を見たことがあるが、一度欠点として認識してしまったものを愛するのは、高校生の私たちにとってとても難しいことである。実際に私も自分の欠点を愛そうと努力したことがあるが、うまくいかずさらに嫌悪の思いが積もるばかりであった。

青年期の段階にいる私たちにとって、自己嫌悪という感情は当たり前であるのかもしれないが、当たり前という一言では片づけられないほど、私たちは負の感情に直面する機会が多い。時には私たちに自ら命を絶つ選択を迫るほどに、自分自身と向き合うことは人生経験の少ない私たちにとって重いものなのである。

作品の最後で、「僕」は来客に向けてこう話している。「ところで君たちはこの家に一枚も鏡がないことに気づいたかな。鏡を見ないで髭がそれるようになるには、けっこう時間がかかるんだぜ、本当の話。」つまり、鏡を通して怖い体験をした「僕」は、また同じことが起こるのを避けるために、鏡を家に置くことはしない。再び自分自身ではない自分に出会うのが怖いのである。

私たちも、「僕」のように鏡を捨ててしまってもよいのではないか。鏡を見なくても髭を剃れるようになった彼のように、見たくないモノから目を背けても、いつか本当の幸せを手に入れることができるはずである。自分が嫌いになりそうなきは、家から鏡をすべて捨ててしまう選択肢を持つことが、多感な今を生きる私たちにとって必要なのだ。

へ向かって語り合って、渚が明日がないことについて少し嘘をついたのは、きつと彼女が泣くのが分かっていたからだろう。

彼が最後に彼女に向けた、「困ったことがあった時は周りを見たほうがいい。案外、みんな自分を気にしてくれてたりするから」という言葉には、この七日間の彼の実感が込められているのだろう。いじめの主犯格と話をするとき、渚が伝えてくれた死神の言葉や家族、友達、これらは短い時間でも死にたいと思っていた渚に死にたくないと思わせるくらい温かい出会いだったのだろう。そしてそれはきつと七日間というタイムリミットがあったから気が付けたのだろう。

私はこの本を最後まで読んで、一日という短い時間の中で生まれるものもあれば、消えてゆくものも多いことが分かった。

最初はただ主人公の渚を笑

いなくったら、朝ご飯も夕ご飯も自分で作らなくてはならない。もし渚と同じように、少し走っただけで心臓が締め付けられるほど体が弱かったら、運動部には入っていないかった。この、日常にありふれていることが人によって違うのかもしれない。

渚は家を後にし、帆波をいじめていた主犯格で元々は帆波と仲の良かった志田に話を付けに行く。帆波を笑顔にするには、志田と彼女の関係を元通りにしなくてはいけないと分かっているのに、なぜか言葉が出ない。そんな時に渚は、「心を込めて伝えれば相手には必ず伝わる」という死神からの言葉を思い出し、正直に仲直りしてほしいと伝え、その後二人は仲直りした。死神の言った、「心を込めて伝えれば相手には必ず伝わる」というセリフは、本の中だけではなく現実世界でも同じだと思った。

最終日の夜、二人は天体観察をしに学校へ向かう。この時、彼女に渚自身しか知らない屋上の鍵のありかを教え、二人で語り合いながら最後の夜を過ごす。会話の中では、明日や未来を想像させる言葉が多く含まれていた。もし、彼がまだ生きていたら、もつと彼女と綺麗な星空を見られただろう。もし彼にまだ命の時間があったら、二人で色々な場所へ行き、二人で思い出を作れただろう。やっとなんか笑うようになった彼女に対して、渚が「まだ生きていたい」と初めて思うように、私もまだ生きて欲しいと願った。彼女は渚が今日、この時間が終わったら、亡くなってしまうことを知らないから笑っていられるのだ。お互いの未来